

近世三条釜座鋳物師の実態について

田 中 聡

I. はじめに

滋賀県教育委員会は、2009年から2012年にかけて、同県内に伝来する明治期以前の梵音具の調査を実施した（以下、滋賀県調査と略記）¹⁾。梵音具とは、仏教において儀式の進行や、日常生活の中で時間を告げるために用いられた、梵鐘や鰐口、鉦鼓、雲版などの鳴器一般の総称であり、日本では古代以来仏具として、また惣村に位置する神社の神器として、大切に伝来されてきた²⁾。

これらの多くは銅の合金製であり、戦国時代末期・幕末・アジア太平洋戦争末期に金属不足を補うため、一斉回収して鋳つぶされ、銃弾や大砲などに転用の憂き目を見るが、それを逃れて現在まで残されているものも推定で数万点に及ぶ。ただ、自治体単位で地域の梵音具の全般的調査が行われた例は数えるほどしかなく、全貌はまだ不明と言わざるを得ない。その中で、滋賀県下の全市町村にて文化財指定を受けていない梵音具の情報を収集し、現地調査を行って未知の文化財の情報を多数発見した試みは、梵音具研究の最新成果として注目に値しよう。

さて金属製の梵音具のなかには、仏典に典拠を持つ韻文・詩文³⁾や、伝来した社寺の由緒、製作を担当した鋳物師、費用を負担した結縁者・寄進者の名前が、陽鋳（鋳型により文様の一部として文字が梵音具の表面から突出）または陰刻（鋳出された梵音具の表面に鑿で文字を刻む）によって示された銘文を有する例がみられる。筆者は上記の滋賀県調査で主に銘文の分析を担当し、それらが貴重な歴史の一次史料としての価値を有することについて認識を新たにした。本稿では特に、中世から幕末にかけて京都の三条釜座に集住し、茶釜から仏具、農具に至る多彩な金属加工を担って全国的にも知られた「三条釜座鋳物師」の作品と、職人の家の系譜関係に注目し、今後の研究の材料を提供したい。

II. 梵音具銘文にみる三条釜座鋳物師

滋賀県調査で確認した梵音具のなかで、京都の三条釜座鋳物師の手になる作品は全体の四割以上を占めている。16世紀末、京の都を支配した織田信長・豊臣秀吉らの庇護下で優れた茶釜を為して「天下第一」号を許された辻与次郎や西村道仁ら名人を輩出し、これ以後その製品の価値が高まったことは、美術工芸史の中ではよく知られるところである⁴⁾。

次に掲げる表1は、梵音具の銘文から三条釜座鋳物師が造ったことがほぼ確実な作品を年表にしたものである⁵⁾。参考として香爐や燈籠なども挙げ、名称の末尾に*マークを付した。

特に注目したいのは冶工に関する記述形式である。可能な限り銘文の用字に忠実に挙げ、「平安城」・「洛陽」・山城国愛宕郡等の所在地の表記、「三条住（人）」等附記の仕方などに冶工の家や個人

表1 三条釜座鋳物師作品表 (稿)

【凡例】「典拠」欄には以下のごとく略記する。

滋賀県調査 … 『滋賀県所在梵音具資料調査報告書』(2013年)

香取A … 香取秀真「金文に現れたる鑄師の本質」(『金工史談』所収)

香取B … 香取秀真「新撰釜師系譜」(『続金工史談』所収)

京都の歴史 … 『京都の歴史』3巻530p、4巻429-434p。

久保仁平 … 京都府内の三条釜座鋳物師作梵鐘(久保仁平『鐘の戸籍(二)梵鐘行脚』掲載分)

坪井良平 … 坪井良平「京都及京都近郊徳川期吉金文年表」(『梵鐘の研究』所収)

作事組HP … 「京町家作事組 作事組だより」50号(2011年11月)(最終閲覧日2021年1月24日)

<http://www.kyomachiya.net/sakuji/tayori/1111.html>

産経新聞 … 『産経新聞』2015年3月7日付『なら再発見』「桂昌院 奈良の文化財修復に尽力」

青森HP … 「青森の魅力」No.2057「長円寺の鐘」(最終閲覧日2021年1月24日)

<http://aomori-miryoku.com/2012/09/11/%E9%95%B7%E5%86%86%E5%AF%BA%E3%81%AE%E9%90%98/>

桑名市HP … 「桑名市埋蔵文化財整理所 桑名市の指定文化財」(最終閲覧日2021年1月15日)

<http://bunka.city.kuwana.mie.jp/html/bunkazai/036.html>

<http://bunka.city.kuwana.mie.jp/html/bunkazai/053.html>

長崎市HP … 長崎市ホームページ「清水寺(せいすいじ)の梵鐘」(最終閲覧日2021年1月15日)

<https://www.city.nagasaki.lg.jp/shimin/190001/192001/p000635.html>

西暦	年号	名称	銘文の作者(冶工・彫工)記名	諱	備考	典拠
1411	応永18	明三寺梵鐘	平安城三条釜座 和田信濃掾国次	国次		滋賀県調査
1435	永享7	来迎院梵鐘	大工 藤原国次	国次		久保仁平
1478	文明10	清水寺梵鐘	大工 藤原国久	国久		久保仁平
1491	延徳3	正休寺梵鐘	大工国久・小工左衛門	国久		滋賀県調査
1517	永正14	知恩院旧蔵梵鐘	三条住御大工 五郎左衛門尉国次	国次	『華頂山由緒系図本記』による。	京都の歴史3
1521	大永1	醍醐寺梵鐘	冶工 藤原朝臣吉久	吉久	洛北北野宮墻(カキ・シヨウ)外にて鑄造。	久保仁平
1542	大永2	桂林寺梵鐘	大工三条 藤原国久・南右衛門家次	国久 家次	亀岡市本梅町平松。(もと丹州天王寺鐘)	久保仁平
1575	天正3	蓮台寺梵鐘	冶工釜座国久	国久		香取A
1577	天正5	本能小学校水鉢*	釜大工 與二郎	与次郎		香取B
1580	天正8	兵主神社鰐口	大工洛陽三条与次郎	与次郎	与次郎作は天正5～慶長15年まで10件(香取)。	香取A・B、 京都の歴史4
1584	天正12	東京美術学校蔵鬼面風爐*	天下一辻与次郎	与次郎	「天下一」。	香取B
1591	天正19	豊国神社の鉄製燈臺	與二郎	与次郎	臺裏に「天正十九年う十一月住吉郷内坂村にてい申す 與二郎」との銘あり。竹に虎の意匠。	香取B
1593	文禄2	羽前国羽黒山麓の橋の鉄製擬宝珠*	天下一道仁	道仁	「天下一」。	香取B
1593	文禄2	本圀寺梵鐘	鑄物師 藤原国次戒名道仁	道仁		香取B・久保仁平・京都の歴史3
1600	慶長5	豊国神社雲龍燈籠*	天下一釜大工与次郎實久	与次郎	慶長5年8月18日作。「天下一」。	香取B・京都の歴史4
1602	慶長7	方広寺大仏殿金銅仏*		?		京都の歴史3
1604	慶長9	大和吉野山大橋擬宝珠*	大工三条藤原朝臣宗兵衛尉国次	国次		香取A
1605	慶長10	京都六角堂梵鐘	鑄師花洛三条天下一沙彌道仁	道仁	「天下一」道仁の作は文禄2～慶長11年まで5件(香取)。	香取A
1605	慶長10	美濃小食庄館梵鐘	三条釜座之住 藤原朝臣西村彌三郎	彌三郎	今松林寺	香取A
1606	慶長11	高台寺梵鐘	踏鞴者 三条之釜座住 藤原対馬守国久	国久	「踏鞴者」	久保仁平
1608	慶長13	正光寺梵鐘	三条釜之座 大工藤原朝臣宗兵衛尉国次	国次		滋賀県調査
1608	慶長13	摂津西宮神社梵鐘	洛陽三条鑄物師 藤原徳左衛門国寶	国寶	岡本甲斐守国富と同一人物であれば、元和6年1件、寛永に4件あり。	香取A
1610	慶長15	玉鳳院梵鐘	大工三条釜座 藤原対馬守国久	国久		久保仁平
1610	慶長15	西善寺梵鐘	山城国愛宕郡三条釜座鑄物師 天下一与次郎藤原實久	与次郎	「天下一」。	滋賀県調査。 香取B
1614	慶長19	方廣寺梵鐘	冶工京三条釜座 名護屋越前少掾藤原三昌	三昌	梵舜日記に京都夷中衆棟梁14人・小工200人・下々3000人。駿府記に脇棟梁11人、東大寺雑事記に棟梁5人・肝煎10人・棟梁脇棟梁併せて14人。	香取A・久保仁平
1616	元和2	智積院梵鐘	鑄師三条釜座 藤原国信	国信		久保仁平

1619	元和5	興隆寺梵鐘	山城国三条釜之座 藤原西村弥左エ門長吉	長吉	綾部市志賀郷町。	久保仁平
1621	元和7	宝巖寺梵鐘	冶工 京都清兵衛尉藤原朝臣成次	成次		滋賀県調査
1622	元和8	金戒光明寺梵鐘	冶工三条釜座 近藤美濃少掾藤原宗久・近藤宗右衛門藤原吉久	宗久 吉久		久保仁平
1624	寛永1	要妙寺鉄燈籠*	三条釜座 藤原対馬守国久	国久	文久2・安永4年の修復銘あり。	坪井良平
1625	寛永2	誓願寺洞燈籠*	三条釜座 藤原藤右衛門国信	国信		坪井良平
1626	寛永3	妙蓮寺梵鐘	三条鑄物師 藤原甲斐守国宝	国宝		久保仁平
1626	寛永3	順慶寺梵鐘	洛陽信濃掾国次	国次		滋賀県調査
1627	寛永4	久昌院梵鐘	三条冶工 天下一藤原實久	實久	「天下一」。	久保仁平
1627	寛永4	宗安寺梵鐘	洛陽釜座住 近藤丹波掾藤久	藤久		滋賀県調査
1628	寛永4	浄福寺梵鐘	冶工三条釜座 藤原朝臣助二郎重次	重次		久保仁平
1628	寛永4	三井寺三層塔擬宝珠*	六条住 植坂作左衛門	?		坪井良平
1631	寛永8	上醍醐寺梵鐘	冶工 藤原藤久	藤久		久保仁平
1631	寛永8	徳元寺梵鐘	冶工 近藤丹波目藤久	藤久	桑名市指定文化財。	桑名市 HP
1632	寛永9	愛宕山麓の青銅製鳥居*	三条釜座鑄物師	?		作事組 HP
1633	寛永10	十念寺梵鐘	山城住三条釜座鑄物師 藤原和田信濃大掾国次・鑿物師五兵衛	国次 五兵衛	「鑿物師」	久保仁平
1633	寛永10	長徳寺梵鐘	三条釜座 藤原朝臣信濃大掾国次	国次	河端通今出川下る。	坪井良平
1635	寛永12	徳川二代廟内の銅製唐獅子香爐*	名越三昌 (初代)	三昌	東京芝公園内。	香取B
1635	寛永12	浄雲寺梵鐘	三条釜座 藤原西村藤左衛門国信	国信	五条伏見街道下る。	坪井良平
1636	寛永13	知恩院梵鐘	冶工三条釜座住 ①和田出雲掾藤原国久 ②近藤丹波目藤原藤久 ③近藤因幡目藤原信安 ④辻伊豆目藤原貞次 ⑤近藤美作目藤原宗次 ⑥■田信濃掾国次 ⑦近藤美濃少掾入道藤原宗次 ⑧岡本甲斐少掾入道藤原国富 ⑨後藤七郎左衛門尉藤原忠満	国久 藤久 信安 貞次 宗次 国次 宗次 国富 忠満	径365cmの巨鐘。同年代の鑄物師の代表メンバーか。■は「和」と考えられる。	坪井良平・久保仁平
1639	寛永16	西方寺	鑄師洛陽三条釜座 西村治兵衛家次	家次	綴喜郡飯岡。寛永16年己卯2月。	香取B
1639	寛永16	総持寺梵鐘	洛陽三条釜之座 近藤美濃守藤原宗久・近藤美作守藤原宗次・近藤堪兵衛尉	宗久 宗次 堪兵衛		滋賀県調査
1640	寛永17	福善寺梵鐘	洛陽 飯田加右衛門尉重次	重次		滋賀県調査
1640	寛永17	十善寺梵鐘	近藤丹波目藤久	藤久	鞍馬口通寺町西。	坪井良平
1641	寛永18	妙心寺浴室梵鐘	藤原対馬守貞久	貞久	※初鑄時。	久保仁平
1641	寛永18	金胎寺梵鐘	鐘大工山城国愛宕郡土車庄 京三条藤原住吉次作 福岡与三右エ門	吉次 与三右 エ門	「鐘大工」。相楽郡和東町原山。	久保仁平
1641	寛永18	酬恩寺梵鐘	冶工洛陽三条釜座 藤原但馬守齊藤成次・同信濃守国次	成次 国次	綴喜郡田辺町新。	久保仁平
1642	寛永19	善正寺梵鐘	冶工三条釜座住 藤原近藤美作守宗次	宗次		久保仁平
1642	寛永19	清水寺梵鐘	京都三条釜座 伊豆守藤原朝臣貞次	貞次	長崎市指定有形文化財。	長崎市 HP
1643	寛永20	総見寺梵鐘	洛陽釜座 飯田加右衛門入道宗雲	宗雲	重次と同一人物か。	滋賀県調査
1644	正保1	広隆寺梵鐘	冶工三条釜之座 辻伊豆大掾藤原實次	實次		久保仁平
1644	正保1	志明院梵鐘	冶工三条釜座 二郎左衛門尉藤原国次	国次		久保仁平
1645	正保2	本覚寺梵鐘	冶工三条釜座 丹波藤久	藤久		久保仁平
1645	正保2	伏見別院梵鐘	洛陽三条釜座 藤原姓福岡氏吉久	吉久		久保仁平
1646	正保3	阿弥陀寺梵鐘	冶工三条釜之座住 近藤美濃掾藤原宗次・福岡兵右衛門藤原吉次・水口弥左衛門尉・近藤弥兵衛尉/彫工 座田八兵衛尉藤原清次・佐野貴兵衛尉藤原安常	宗次 吉次 清次 安常		久保仁平
1646	正保2	神泉苑梵鐘	鑄物師釜座之住 名越出羽大掾入道浄正	浄正		久保仁平
1646	正保3	常高寺梵鐘	鑄師洛陽三条釜座 西村次兵衛家次	家次		久保仁平
1651	慶安4	興聖寺梵鐘	冶工 近藤丹波掾藤原藤久・近藤勘兵衛尉宗清	藤久 宗清	宇治市宇治山田。	久保仁平
1651	慶安4	日光輪寺獅子香爐*	冶工洛陽三条 浄味子三知	三知	従四位上行羽林兼周防守源朝臣重宗が寄進。	香取B
1652	承応1	安国寺梵鐘	冶工平安城堀川住 嶋馬氏次	氏次	綾部市安国寺町。	久保仁平
1652	承応1	黄梅院梵鐘	(和田信濃作)	国久?	無銘(寺記録による)。	久保仁平

1652	承応1	本法寺梵鐘	近藤美作掾藤原宗次	宗次		坪井良平
1653	承応2	日光山大猷院廟前の銅製燈臺2基*	山城国京三条住釜屋大西五郎左衛門尉村長	村長	加能越三国主菅原大千代丸が猷納(承応2年4月20日)。村長は大西家2代浄清の晩年の名。	香取B
1653	承応2	三室戸寺梵鐘	冶工洛陽住 藤原飯田宗三/銘彫作後藤正乘弟子 中村勝左衛門尉藤原秀正	宗三秀正		久保仁平
1655	明暦1	総寧寺梵鐘	(冶工)京釜之座近藤丹波掾藤原藤久・(彫工)和田清兵衛尉国次	藤久国次	和田国次作品の湖北での初見。	滋賀県調査
1656	明暦2	妙教寺梵鐘	京六条若宮住 天下一御仏具屋 前名出羽後名陸奥大掾藤原家次	家次	家次は出羽→陸奥大掾に転ず。「天下一」。	久保仁平
1657	明暦3	金蔵寺梵鐘	三条釜座 近藤勘兵衛藤原定延	定延	乙訓郡。	坪井良平
1657	明暦3	光明寺梵鐘	三条釜座 和田信濃大掾藤原国次	国次	粟生。	坪井良平
1657	明暦3	品川寺梵鐘	冶工三条大西五郎左衛門尉藤原村長	村長		香取B
1659	万治2	少林寺梵鐘	洛陽釜座住 和田信濃大掾藤原国次	国次		滋賀県調査
1660	万治3	栄興寺梵鐘	山城愛宕郡三条釜座住人鑄物師御大工大西五郎左衛門藤原村長	村長		香取B
1662	寛文2	智恩寺銅燈籠*	釜座 和田信濃掾藤原国次	国次		坪井良平
1662	寛文2	蓮華寺梵鐘	冶工 信濃掾国次	国次		久保仁平
1662	寛文2	慈敬寺梵鐘	洛陽 和田信濃掾藤原国次	国次		滋賀県調査
1662	寛文2	西林寺梵鐘	釜座 近藤丹波掾藤原藤久	藤久	京極。	坪井良平
1663	寛文3	見塔寺梵鐘	冶工洛陽釜座住 和田信濃大掾藤原国次	国次		滋賀県調査
1663	寛文3	長香寺梵鐘	和田信濃掾藤原国次	国次		坪井良平
1663	寛文3	和東天満宮梵鐘	冶工洛陽釜座住 近藤丹波掾	藤久?		久保仁平
1664	寛文4	誓願寺銅燈籠*	釜座 丹波入道宗欣	宗欣		坪井良平
1664	寛文4	妙心寺東海庵	陸奥大掾家長	家長		坪井良平
1665	寛文5	勝持寺鰐口	釜座 近藤丹波	宗欣?	乙訓郡。	坪井良平
1665	寛文5	東福寺梵鐘	釜座 近藤丹波入道宗欣	宗欣		坪井良平
1665	寛文5	無動寺明王堂梵鐘	冶工洛陽釜座 近藤丹波掾	藤久?		滋賀県調査
1666	寛文6	十輪寺梵鐘	冶工洛陽釜座 安見孫三郎常玄	常玄	乙訓郡。	久保仁平
1666	寛文6	本長寺梵鐘	近藤丹波掾入道宗欣	宗欣	大津市ノ西北、西福寺ノ北(坪井)。	坪井良平
1666	寛文6	薬師寺梵鐘	三条釜座 飯田助左衛門藤原吉政	吉政	塩小路村。	坪井良平
1667	寛文7	真経寺梵鐘	三条釜座 近藤丹波掾佐久	佐久	乙訓郡向日町。	坪井良平
1667	寛文7	立本寺梵鐘	洛陽三条釜座 西村九兵衛家久・同次兵衛頼久	家久頼久	兄弟か。七本松仁和寺街道の北にある寺。	香取B
1667	寛文7	霊水寺梵鐘	洛陽釜座住 和田信濃大掾藤原国次	国次		滋賀県調査
1669	寛文9	朝日寺梵鐘	和田信濃大掾藤原国次	国次	北野。	坪井良平
1669	寛文9	観音寺梵鐘	冶工 和田信濃大掾藤原国次	国次	龍宝山龍泉禪庵鐘。	久保仁平
1669	寛文9	正法寺梵鐘	洛陽釜座住 和田信濃大掾藤原国次	国次	八幡市八幡清水井。	久保仁平
1669	寛文9	清涼寺阿弥陀堂梵鐘	天下一出羽大掾宗味	宗味	管見の限り、「天下一」を名乗る最後の例。	坪井良平
1669	寛文9	本満寺梵鐘	釜座 和田信濃大掾藤原国次	国次		坪井良平
1670	寛文10	鞍馬寺梵鐘	冶工洛陽釜座住 近藤丹波掾藤久・同子久政	藤久久政	菅原知長銘。藤久-久政は父子関係。	久保仁平
1670	寛文10	酒波寺梵鐘	■工近京三条釜之座近藤因幡鑄	?	近藤因幡目藤原信安の系統か。	滋賀県調査
1670	寛文10	立本寺銅燈籠*	釜座 和田信濃掾藤原国次			坪井良平
1671	寛文11	光雲寺梵鐘	冶工 和田信濃掾藤原国次	国次		久保仁平
1672	寛文12	衡梅院梵鐘	冶工 陸奥大掾藤氏家次	家次	六条若宮在住。	久保仁平
1672	寛文12	千手院梵鐘	洛陽釜座住 和田信濃大掾藤原国次	国次	もと泰平寺鐘。「釜座」は釜座の誤りか。	滋賀県調査
1673	延宝1	真宗院梵鐘	冶工 和田信濃掾藤原国次	国次	延宝2年瑞山撰。	久保仁平
1673	延宝1	延暦寺西塔釈迦堂梵鐘	冶工洛京釜座近藤丹波掾藤久	藤久		滋賀県調査
1674	延宝2	真宗院梵鐘	和田信濃掾藤原国次	国次		坪井良平
1674	延宝2	本涌寺梵鐘	釜座 近藤丹波掾	藤久?		坪井良平
1675	延宝3	青岸寺梵鐘	京釜座住 和田信濃掾藤原国次	国次	菩薩像・飛天(陽刻)あり。	滋賀県調査
1675	延宝3	西福寺梵鐘	三条釜座 貝島土佐掾藤原定賢	定賢	大津。	坪井良平
1677	延宝5	北野神社銅燈籠*	三条釜座 丹波掾之子久政	久政	「丹波掾之子」。	坪井良平
1677	延宝5	金戒光明寺銅燈籠*	三条釜座 近藤丹波掾子久政	久政	著名な藤久の継承者であることを示すか。	坪井良平
1677	延宝5	智恩寺銅燈籠*	三条釜座 和田信濃掾藤原国次	国次		坪井良平
1677	延宝5	頂妙寺梵鐘	冶工 名越氏昌乘斉浄味	浄味	斉→斎か。	久保仁平

1677	延宝5	靈源寺梵鐘	冶工 信濃大掾藤原国次	国次		久保仁平
1678	延宝6	隱龍院梵鐘	冶工 洛陽釜座近藤丹波掾久政	久政	八幡山極楽寺鐘。綾部市高津町。	久保仁平
1679	延宝7	清水寺擬宝珠*	釜座 近藤勘兵衛尉宗清	宗清		坪井良平
1679	延宝7	浄源寺梵鐘	鑄工釜座 和田信濃大掾藤原国次	国次		滋賀県調査
1679	延宝7	成菩提院梵鐘	鑄師京兆東三条 和田信濃掾国次	国次		滋賀県調査
1681	天和1	円通寺梵鐘	冶工 信濃掾国次	国次		久保仁平
1681	天和1	石塔寺梵鐘	京釜座住 和田信濃掾藤原国次	国次		滋賀県調査
1681	天和1	蓮敬寺梵鐘	冶工京師 和田信濃掾	国次?		滋賀県調査
1682	天和2	本隆寺梵鐘	冶工釜座住 名越昌乘齊浄味・近藤丹波掾久政	浄味 久政		久保仁平
1682	天和2	西王寺梵鐘	冶工洛陽釜座 和田信濃大掾壽茂	壽茂		久保仁平
1682	天和2	福田寺梵鐘	京釜座住 和田信濃掾藤原国次	国次	池間4面に飛天を陽鑄。	滋賀県調査
1682	天和2	光瀬寺梵鐘	冶工帝都住 信濃大掾国次	国次		久保仁平
1682	天和2	薬師堂鑿口	釜座 近藤丹波守	久政?		坪井良平
1683	天和3	安福寺梵鐘	冶工釜座 和田信濃掾入道	国次	朝鮮鐘。大阪府柏原市玉手。「長寿七十一才作」	坪井良平
1684	貞享1	行願寺梵鐘	近藤丹波久政	久政	竹屋町寺町。	坪井良平
1684	貞享1	光悦寺梵鐘	和田信濃掾藤原国次	国次	鷹峯村。	坪井良平
1684	貞享1	光福寺梵鐘	三条坊釜座 西村弥市郎藤原吉茂	吉茂		坪井良平
1684	貞享1	松尾寺梵鐘	洛陽釜座住 和田信濃掾藤原国次	国次		滋賀県調査
1685	貞享2	知善院梵鐘	冶工洛陽釜之座住 和田信濃大掾藤原国次作	国次		滋賀県調査
1686	貞享3	泉涌寺梵鐘	冶工 陸奥掾家長	家長		久保仁平
1687	貞享4	善峯寺梵鐘	冶工三条釜座 近藤丹波掾佐久	佐久		坪井良平
1688	元禄1	神応寺梵鐘	鑄師 筑後大掾浄味	浄味	(今亡)	坪井良平
1688	元禄1	妙蓮寺半鐘	近藤丹波掾藤原佐久	佐久	寺町小川西。	坪井良平
1688	元禄1	大聖寺梵鐘	梟(ふ)氏洛陽筑後大掾藤原常味	常味	印まで陰刻。	滋賀県調査
1688	元禄1	法金剛院梵鐘	冶工洛陽釜座 近藤丹波掾藤原佐久	佐久	六条若宮在住。	久保仁平
1689	元禄2	本誓寺梵鐘	三条釜座住 近藤丹波掾佐久	佐久		滋賀県調査
1690	元禄3	西宗寺梵鐘	三条釜座 和田吉兵衛国次	国次	宇治郡小野庄山品郷。	坪井良平
1692	元禄5	安楽寺院梵鐘	洛陽釜座闕(コウ)座某等数十	某	泊如運敵銘。	久保仁平
1692	元禄5	茲眠寺梵鐘	和田信濃大掾藤原国次 岡田清左衛門尉重秀	国次 重秀	七本末出水東。	坪井良平
1692	元禄5	南禅寺梵鐘	(冶工 和田信濃)	国次?	菅原豊長書(『南禅寺史』より)。	久保仁平
1694	元禄7	花階寺梵鐘	京大仏 西村左近藤原宗春	宗春	大津。	坪井良平
1694	元禄7	不動院梵鐘	洛陽之冶工 名越氏昌乘齊浄味	浄味		久保仁平
1694	元禄7	開運寺梵鐘	洛陽三条釜座 和田信濃大掾藤原国次	国次		滋賀県調査
1694	元禄7	昌福寺梵鐘	六条住 丹下播磨大掾貞的	貞的	若宮六条か。	久保仁平
1694	元禄7	法隆寺銅製燈籠*	鑄工洛陽之住 近藤丹波掾藤原佐久	佐久	桂昌院奉納。	産経新聞
1695	元禄8	法厳寺梵鐘	冶工洛陽三条釜座住 和田信濃掾藤原国次	国次		久保仁平
1696	元禄9	乙訓寺梵鐘	信州大掾藤原国次	国次	乙訓郡。	坪井良平
1696	元禄9	実相寺梵鐘	冶工洛陽三条釜座住 貝鳥浄安・同甚左門(ママ)吉信	浄安・ 吉信	「甚左衛門吉信」の誤記か。	久保仁平
1697	元禄10	親縁寺梵鐘	冶工堀川住 筑後大掾常味	常味		久保仁平
1697	元禄10	石塔寺梵鐘	三条釜座 奥田庄右衛門尉政勝	政勝	乙訓郡向日町。	坪井良平
1697	元禄10	万福寺梵鐘	洛陽鑄工 和田信濃大掾藤原国次	国次	宇治市五ヶ庄。	久保仁平
1697	元禄10	楊柳寺梵鐘	信濃掾藤原国次	国次	桑名市指定文化財。万福寺鐘の試作か。	桑名市 HP
1698	元禄11	芳春院梵鐘	冶工 和田信濃大掾藤原国次	国次	大徳寺内。	久保仁平
1699	元禄12	南真経寺梵鐘	冶工洛陽釜座住 近藤丹波掾佐久	佐久	寛文7年元政銘あり。	久保仁平
1699	元禄12	妙光寺梵鐘	釜座住 近藤丹波掾佐久	佐久	大津上博旁町。	坪井良平
1701	元禄14	本能寺梵鐘	和田信濃掾藤原国次	国次		坪井良平
1702	元禄15	光明寺仏像*	三条釜座 和田氏国次・堀川住 筑後大掾藤原常味	国次 常味	粟生。	坪井良平
1702	元禄15	浄願寺梵鐘	洛陽釜座 和田信濃大掾藤原国次	国次	撞座は16葉菊型(勅許)。	滋賀県調査
1702	元禄15	道入寺梵鐘	釜座 近藤丹波	佐久?		坪井良平
1703	元禄16	満願寺梵鐘	鑄匠 和田信濃大掾藤原国次	国次	池間に度量衡の意匠の陽鑄文様あり。	久保仁平
1703	元禄16	円光寺梵鐘	冶工京師釜座 近藤丹波掾佐久	佐久		久保仁平
1704	宝永1	寂光寺梵鐘	冶工名越浄味藤原昌乘 同姓弥右衛門尉昌晴	昌乘 昌晴		久保仁平
1704	宝永1	要妙寺梵鐘	名越浄味藤原昌乘 同姓弥右衛門(ママ)尉昌晴	昌乘 昌晴	仁王門通新高倉。	坪井良平

1705	宝永2	慶善寺梵鐘	三条釜座 和田信濃掾藤原国次	国次	近江志賀郡。	坪井良平
1707	宝永4	大黒神社	奥田大和掾義盛 近藤丹波掾藤久	義盛 藤久	松崎。	坪井良平
1709	宝永6	岩隆寺梵鐘	京城治工和田信濃掾藤原国次	国次	2・3区間の撞座下に治工名あり。	滋賀県調査
1709	宝永6	大念寺梵鐘	三条釜座 和田信濃掾藤原国次	国次	乙訓郡大山崎。	坪井良平
1710	宝永7	知恩院勢至堂梵鐘	三条釜座 和田信濃大掾藤原国次	国次		坪井良平
1710	宝永7	勝持寺梵鐘	釜座住 近藤丹波掾久政	久政	乙訓郡。	坪井良平
1710	宝永7	椿寺梵鐘	釜座 近藤丹波掾佐久	佐久	仁和寺街道紙屋川畔。	坪井良平
1710	宝永7	妙伝寺梵鐘	治工洛陽釜座住 近藤丹波掾藤久	藤久		久保仁平
1710	宝永7	弘誓寺梵鐘	治工洛陽釜之座住 近藤丹波掾藤久	藤久		久保仁平
1711	宝永8	真如寺梵鐘	三条釜座 奥田大和掾藤原正次	正次	岩倉。	坪井良平
1711	正徳1	法華寺梵鐘	治工 洛陽釜之座住 奥田大和掾藤原正治	正治	向日市上植野町。	久保仁平
1711	正徳1	要法寺梵鐘	治工三条釜座 和田信濃掾藤原国次	国次	孫橋通新高倉。	久保仁平
1712	正徳2	善法寺梵鐘	治工平安城釜座住 近藤丹波掾藤久	藤久	宇治市宇治妙薬。	久保仁平
1712	正徳2	来迎寺梵鐘	洛陽三条釜座住 近藤丹波藤久	藤久		滋賀県調査
1713	正徳3	妙顕寺梵鐘	治工師三条釜座住 近藤丹波掾藤久	藤久		久保仁平
1714	正徳4	華山寺梵鐘	在京 信濃掾藤原国次	国次		坪井良平
1714	正徳4	念慶寺梵鐘	三条釜座 和田信濃大掾藤原国次	国次		滋賀県調査
1714	正徳4	専宗寺梵鐘	洛陽三条釜座住 治工近藤丹波掾藤久	藤久		滋賀県調査
1716	正徳6	長円寺梵鐘	近藤丹波藤久	藤久	青森県五所川原市。	青森 HP
1718	享保3	妙泉寺梵鐘	三条釜座 奥田大和掾藤原正次	正次	愛宕郡松崎村。	坪井良平
1718	享保3	福応寺梵鐘	洛陽三条釜座住 貝取甚左衛門吉信	吉信	銘寄進者は「南都住 源奥ノ屋 治兵衛定好」。	久保仁平
1719	享保4	聖財寺梵鐘	洛陽三条釜座 和田信濃大掾藤原国次	国次		滋賀県調査
1719	享保4	萬松院梵鐘	洛陽三条釜座住 治工近藤丹波掾敬範 焉	敬範		滋賀県調査
1719	享保4	禅華庵梵鐘	三条釜座 和田信濃掾藤原国次	国次	修学院村。	坪井良平
1720	享保5	地安禅寺梵鐘	梟(ふ)氏洛陽三条釜座 和田信濃大掾藤原国次	国次		滋賀県調査
1722	享保7	北真径寺梵鐘	治工 洛陽釜座住 奥田大和掾藤原正次	正次	奥田正治と父子か。向日市鶏冠井町。	久保仁平
1723	享保8	安養寺梵鐘	京兆梟(ふ)氏田中伊賀掾藤原為秀	為秀	池間に大きな梵字陽鑄あり。	滋賀県調査
1724	享保9	明性寺梵鐘	治工平安城釜座 和田信濃大掾藤原国次	国次		滋賀県調査
1725	享保10	虚空蔵寺梵鐘	貝島甚左衛門尉藤原吉信	吉信	嵯峨。	坪井良平
1725	享保10	法輪寺梵鐘	京三条釜座住鋳物師 貝取甚在(ママ) 衛門尉藤原吉信	吉信		久保仁平
1725	享保10	廬山寺梵鐘	三条釜座 貝島甚左衛門尉吉信	吉信		坪井良平
1725	享保10	サンショー(ママ) 寺鯛口	釜座 和田信濃	国次		坪井良平
1731	享保16	南陽寺梵鐘	治工京師釜座 和田氏藤原国次	国次?	船井郡園部町美園町。	久保仁平
1731	享保16	法輪寺梵鐘	鑄匠三条釜座 和田信濃掾藤原国次	国次		久保仁平
1731	享保16	興仙寺梵鐘	三条釜座 和田信濃大掾藤原国次	国次		滋賀県調査
1732	享保17	安祥院梵鐘	治工三条釜座 和田信濃掾藤原国次	国次		久保仁平
1734	享保19	長寿院梵鐘	治工洛陽三条釜座 近藤丹波掾藤久	藤久		久保仁平
1734	享保19	常照寺梵鐘	三条釜座 近藤丹波掾	佐久?	葛野郡鷹峯村。	坪井良平
1735	享保20	泉経寺梵鐘	三条釜座 和田信濃大掾国次	国次		坪井良平
1736	元文1	大仙院梵鐘	治工 和田信濃大掾藤原国次	国次		久保仁平
1738	元文3	延暦寺梵鐘	洛陽三条釜座 和田信濃大掾藤原国次	国次		滋賀県調査
1738	元文3	水度神社梵鐘	京三条釜座住 御鋳物師 貝取土佐掾藤原定賢	定賢	城陽市寺田水度坂。貝島系統。	久保仁平
1739	元文4	玉泉寺梵鐘	鑄工京都釜座住 和田信濃大掾	国次?		滋賀県調査
1740	元文5	福正寺梵鐘	三条釜座 和田信濃大掾藤原国次	国次	印まで陰刻・多数の交名	滋賀県調査
1736-41	元文年間	椿堂梵鐘	和田信濃掾藤原国次	国次	近江阪本?	坪井良平
1743	寛保3	永観堂梵鐘	西村左近藤原邦延	邦延		坪井良平
1743	寛保3	禅林寺梵鐘	藤原邦延(延カ)	邦延 (延カ)		久保仁平
1743	寛保3	吉祥神社?梵鐘	三条釜座 貝島土佐掾藤原定賢	定賢	紀伊郡吉祥院村	坪井良平
1747	延享4	願行寺梵鐘	京三条釜座住人 梟(ふ)工御鋳物師 貝取土佐掾藤原定賢	定賢	宇治市木幡西中。	久保仁平
1747	延享4	称名寺梵鐘	鑄工京都三条釜座 和田信濃大掾藤原国次	国次	亀岡市西堅町。	久保仁平
1749	寛延2	西本願寺梵鐘	三条釜座 西村弥三右衛門藤原重清	重清	山科村。	坪井良平

1750	寛延3	西迎院梵鐘	三条釜座 和田信濃大掾藤原国次	国次		坪井良平
1751	宝暦1	正林寺梵鐘	冶工三条釜座 和田信濃大掾藤原国次	国次	洛東小松谷。	久保仁平
1752	宝暦2	法性寺梵鐘	冶工京三条釜座 和田信濃大掾藤原国次・西村和泉少掾藤原守昌	国次 守昌		久保仁平
1752	宝暦2	安明寺梵鐘	三条釜座 和田信濃大掾藤原国次	国次		滋賀県調査
1752	宝暦2	宝林寺梵鐘	冶工山城国京三条住 国松庄兵衛秦重久	重久	船井郡日吉町四ッ谷。	久保仁平
1753	宝暦3	北野神社鉄燈籠*	三条釜座 近藤■兵衛藤原定延	定延		坪井良平
1753	宝暦3	善光寺梵鐘	三条釜座 奥田大和藤原正次	正次	堀内村。	坪井良平
1754	宝暦4	正伝寺梵鐘	次(ママ)工三条釜座住 奥田大和藤原正次	正次	愛宕郡西賀茂。	久保仁平
1754-56	宝暦4-6	真如堂擬宝珠*	三条釜座 奥田大和藤原正次	正次	6基あり。	坪井良平
1759	宝暦9	什本寺梵鐘	三条釜座 和田信濃藤原国次	国次	下河原通二丁目。	坪井良平
1759	宝暦9	真正極楽寺梵鐘	三条釜座住 奥田大和藤原正次	正次		坪井良平
1759	宝暦9	真如堂梵鐘	三条釜座 奥田大和藤原正次	正次		坪井良平
1760	宝暦10	東寺香炉*	釜座 奥田次郎左衛門	正次?		坪井良平
1760	宝暦10	明寿院梵鐘	京三条釜座住 奥田大和藤原正次	正次		久保仁平
1763	宝暦13	福聚院梵鐘	城州京岩上住 近藤佐久 於洛陽鑄焉	佐久	竹野郡丹後町中浜。	久保仁平
1763	宝暦13	福田寺梵鐘	三条釜座 和田信濃藤原国次	国次	東寺東。	坪井良平
1765	明和2	大光寺梵鐘	三条釜座 近藤播磨藤原定延	定延		坪井良平
1775	安永4	浄雲寺梵鐘	釜座 奥田次郎左衛門	正次?	岩倉村	坪井良平
1776	安永5	天性寺梵鐘	三条釜座 和田吉兵衛国次	国次		坪井良平
1778	安永7	宝幢寺梵鐘	京三条釜座住 冶工近藤播磨藤原定延	定延	邦延一定延?	久保仁平
1782	天明2	端光寺梵鐘	三条釜座 和田吉兵衛国次	国次		坪井良平
1787	天明7	西向寺梵鐘	京三条釜座住 冶工近藤播磨藤原定延	定延	宝幢寺梵鐘と全く同文の冶工名表記。	久保仁平
1787	天明7	豊国神社の鉄製燈臺*	鐵匠 藤兵衛藤原勝業	勝業	竹に虎の意匠。屋根の擬宝珠に「天明七丁未歳夏五 …」とあり。	香取B
1791	寛政3	御霊神社擬宝珠*	釜座 和田信濃	国次		坪井良平
1791	寛政3	三玄院梵鐘	和田信濃藤原国次	国次		久保仁平
1793	寛政5	三玄院梵鐘	冶工 和田信濃藤原国次	国次	大徳寺内。	坪井良平
1800	寛政12	金戒光明寺梵鐘	京都 国松庄兵衛忠宣	忠宣		坪井良平
1803	享和3	妙心寺僧堂梵鐘	六条醒井住 冶工山田対馬少掾末孫藤原国久	国久		久保仁平
1806	文化3	万国寺半鐘	京岩上住 森島播磨大掾藤原義只	義只		坪井良平
1810	文化7	宝幢院梵鐘	三条釜座 近藤播磨	定延?		坪井良平
1813	文化10	東本願寺梵鐘	奥田次郎左衛門	正次?		坪井良平
1816	文化1	大徳寺梵鐘	和田信濃藤原国次	国次		久保仁平
1819	文政2	北野神社銅牛*	三条釜座 近藤播磨藤原政門	政門		坪井良平
1821	文政4	青龍寺梵鐘	彫工 京金精司義光	義光	寛永19年9月初鑄。銘文は榮琳撰。	久保仁平
1828	文政11	本隆寺擬宝珠*	和田信濃藤原国次	国次		坪井良平
1829	文政12	唯泉寺梵鐘	鍛(ヨウ)工 京都和田信濃藤原国次	国次	初鑄は寛文9年(1669)、冶工「大津住藤原姓田中恒次」。	滋賀県調査
1839	天保10	清涼寺梵鐘	平安城三条釜座住 冶工和田信濃大掾藤原国次	国次		久保仁平
1840	天保11	頂法寺梵鐘	和田信濃大掾藤原国次・近藤播磨大掾藤原尚房	国次 尚房	東洞院六角。	坪井良平
1843	天保14	護国院梵鐘	釜座 和田信濃大掾壽茂	壽茂	建仁寺内。	坪井良平
1830-44	天保年中	神応寺梵鐘	釜座 和田信濃大掾藤原国次・近藤播磨大掾藤原尚房	国次 尚房	綴喜郡八幡。頂法寺梵鐘と同じ鑄物師の共作。	坪井良平
1845	弘化2	宝菩提院梵鐘	三条釜座 和田信濃大掾藤原国次	国次	向日町。	坪井良平
1847	弘化4	向日神社鉄擬宝珠*	三条釜座	?		坪井良平
1848	嘉永1	壬生寺梵鐘	釜座住 冶工和田信濃大掾壽茂	壽茂		久保仁平
1852	嘉永5	大念寺梵鐘	京釜座住 冶工和田信濃大掾	壽茂?		久保仁平
1859	安政6	長福寺梵鐘	京釜座住 御鑄物師 冶工松下安兵衛源国保	国保		久保仁平
江戸		西音寺梵鐘	洛陽釜座住 近藤丹波掾	藤久?		滋賀県調査
江戸後期		仏光寺梵鐘	京三条釜座 冶工近藤播磨藤原定延	定延		久保仁平

に特徴的な表現が確認できないかと考えた。例えば1778年の宝幢寺・1787年の西向寺の梵鐘は「京三条釜座住 冶工近藤播磨藤原定延」と全く同一文であり、こうした点に注目することで銘文の字配りや刻字の仕方など、鋳物師毎の特徴（個性）、あるいは各家に伝承される表現の特性などを考える材料が得られる。近年、滋賀県守山の辻村に端を発する辻鋳物師の研究等では、梵音具の文様や撞座・龍頭の形状などを比較することから、冶工の系統ごとの作風の差異や、同系統における技術の伝承等が解明されつつある⁶⁾。銘文分析は、こうした形式分類と合わせて検討出来るのではないか。

表1で「天下一」表記が見られるのは、1584年（辻与次郎）、1593年（西村道仁）、1600年（辻）、1605年（西村）、1610年（辻）、1627年（辻）、1656年（西村家次）、1669年（出羽大掾宗味）であり、他の鋳物師家にはこの名乗りが見られない点は、やはり信長・秀吉といった最高権力者から一代限りで使用を許された称号であった可能性が高い。

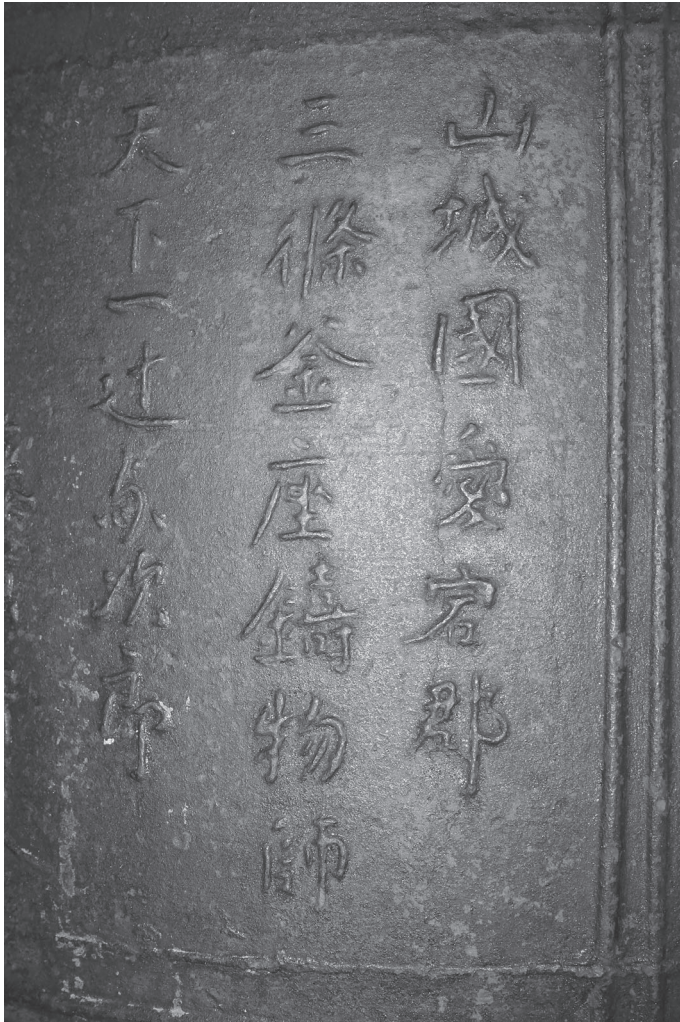


写真1 西善寺梵鐘 池の間の銘文（一部分）

左に挙げた写真1は秋田市の西善寺に現存する梵鐘の銘文（表1、1610年の頃を参照）である。現在確認された限りでは、三条釜座鋳物師の作品のなかで最も北にあり、鋳物師が当地まで「出作」（出張）して作った梵鐘と考えられている。

銘文からは、現在秋田市の中心部に位置する同寺がかつて「土崎湊」にあったこと、そして作者が「山城国愛宕郡三条釜座鋳物師 天下一辻与次郎」であることが読み取れる。与次郎の作風がよく分る、シンプルだが風格のある作品である。

表1において興味深いのは、管見の限り「天下一」の名乗りの最後の例である出羽大掾宗味であり、この人物がどの家の系統なのか不詳だが、その前の1656年の使用例をみると、西村家次が「京六条若宮住 天下一御仏具屋」と名乗っており、既にして権力者に付与された称号ではなく、仏具屋としての宣伝文句として「天下一」が用いられている。家次は「出羽大掾」から「陸奥大掾」へと改名したとあり、出羽大掾宗味も西村家次の系譜に連なる鋳物師

とみなすことは可能ではないだろうか。以上より、「天下一」が特定の名工の公称とされた時期は16世紀末から17世紀20年代頃までに限られ、17世紀後半以降は意味合いを変えて家業の広告に用いられたことが想定出来る。

また冶工の所在地表記については、推移を見ても必ずしもきれいに表現上の変化が表れていると

は言い難い。が、17世紀初頭までは住地を書かずに「与次郎」など特定冶工名のみ挙げるものや、「三條」「花洛」、そして「釜之座」と釜座突抜通に位置する鋳物師の座であることに重きを置いた表現などが、それぞれ別個に用いられている。

ところが慶長年間以降、地名としての「三条釜座」「洛陽釜座」という表現が大部分に定形として用いられるようになり、この傾向が幕末まで持続することが認められる。これは、品質の高さを表現する一種の地域ブランド名として、「京釜座」「平安城釜座」「三条釜座」が全国的に認知・浸透したためと考えられるのではないか。

また表1の「諱」欄には冶工の諱を挙げたが、その推移をみると和田吉兵衛国次のように幕末期まで歴代で同じ名を継ぎ、梵鐘を作り続ける家がある一方、釜師として知られた名越家や大西家の手になる梵音具作品は江戸後期にはほぼ見られなくなる。家毎に得意とする品種が分化する過程を示すものであろう。また三条釜座の地を離れ、「大仏」（豊国神社周辺）や六条若宮、醒井などといった、市中から東部・南部へ移って仏具の工房を構える家が増えるなど、釜座の特権的地位が弱まり、鋳物師が市域の周縁部に拡散する傾向の一端も認めることが出来る。

やがて幕末に至り、1864年に下京一帯を焼亡させた「どんでん焼け」（禁門の変に端を発して起こった大火）は、三条釜座周辺も焼け野原に変え、大西家や高木家等の例外を除き、工房を構えていた多くの鋳物師の家は、その後この地に戻って来ることは無く、中世以来の「三条釜座鋳物師」の系譜の過半が以後見失われることとなったのである。

Ⅲ. 「釜座伝来記」にみる鋳物師の系統と組織

それでは、三条釜座鋳物師が最も発展した近世において、釜座（釜之座）にはどのような鋳物師職人が同業者組織のもとに編成され、全国から寄せられる多数の注文に応じていたのだろうか。その実態について伝える古文書から、とくに鋳物師名に関する史料を整理し、彼らの活動を考える上で参考となる一素材を提供したい。

この問題については、既に戦前の豊田武、水上毅、寺尾宏二、廣岡泰らの研究⁷⁾をはじめ、京都以外の主要な鋳物師集団も含めて、中・近世における商業史研究の一環として釜座組織の解明が進められている⁸⁾。その際に分析の対象とされている主な古文書は、戦前の研究において『釜座古文書集』と名づけられ、現在は京都市歴史資料館に写真版が架蔵されている『釜座町文書』であり、これに含まれる「釜座伝来記」・「座法掟書写」といった証書類の写しから、三条釜座が洛中における鋳物師商売の独占権を織豊政権期において認められていたこと、また各家の養子・弟子の公認基準や、座人資格の取得方法、座外の鋳物師への禁制などを定めた座法の推移が論じられてきた。それによれば、釜座の組織を取り纏めるのは「大工所年寄」と呼ばれる役職に就く鋳物師であり、座衆のなかから三名が選ばれ、一老・二老・三老と名乗った。この役は特定の家に踏襲されるわけではなく、数年で交替される。座衆は最大で八八名を数えたが、そこでの席次もいわゆる「名人上手」を取りたてて優遇せず、座衆全体の平等な権利・義務に基づいて運営されていたと考えられている⁹⁾。

この点について、実際にはどのような鋳物師が座を構成していたのかを知るため、次に挙げる表2・表3を作成した。典拠は「高木（治）家文書」である。この文書は三条通新町西入釜座町に住する釜師・高木治郎兵衛家に伝わったものであり、かなりの部分が上記の「釜座町文書」とほぼ同内

容で、18世紀末頃に複数の家において座に継承されてきた重要な証書類を整理し、写しを作ったものと考えられる。そのうち「釜座伝来記」には天正2年の諸役免除の繪旨写から始まり、各時期の年寄名、座衆名、座に加わるための儀礼である烏帽子着に列した者、新たに座入りした者の名が時を追ってリストアップされており、これと「釜座町文書」と合わせると天保12年までの推移を確認することが可能である。

表2は慶長7年から寛文8年までの座衆(上座・下座)と新たに元服した者(烏帽子着)の名簿であり、座衆全員の名前が分かるのは慶長7(1602)年・元和9(1623)年・寛永2(1625)年の計3回、他は烏帽子着を迎えた者の名簿となっている。ゴシック体で記しているのは、表1の鋳物師名と重複する名前であるが、表2のほとんどは「弥三郎」「長吉」といった字(通称)や「宗清」「道仁」といった法名で、特に前者に関しては特定個人を同定できないものが多い。ただ、慶長7年における上座に所属する「善正」は名越善正、「一旦」は辻与次郎、「道仁」は西村道仁、「宗久」は近藤宗久、「甚左衛門」は貝取吉信などと、該当者が推定できる者も含まれている。寛永2年12月3日の88名の中では、「与三右衛門」は福岡姓、「加右衛門」は飯田重次(入道宗清)、官名が座衆間で通称として知られていた例と思われる「対馬」は対馬守貞久、「信濃」は和田信濃掾吉兵衛国次を指すか。これを見る限り、三条釜座鋳物師のなかで、主に梵鐘などを造っていた家は数軒程度に止まっていたことが分かる。

この表2が釜座内部でのみ通用している呼称によって構成されているのと比べると、表1にみられる梵音具銘文における冶工表記は(「天一」辻与次郎は除く)大半が姓+字+諱によって構成されており、よりフォーマルな名乗りであると言える。表1から、銘文において「大工」と記している事例に注目すると、この官名を記した例がそもそも少なく、しかも17世紀初頭以降は殆ど用いられなくなっている。この「大工」銘については、一般的に冶工の別称として理解されているが、この限定的使用を考えると、三条釜座鋳物師においては特に「大工所」(を統率する人物)を表す称号で

6132 166

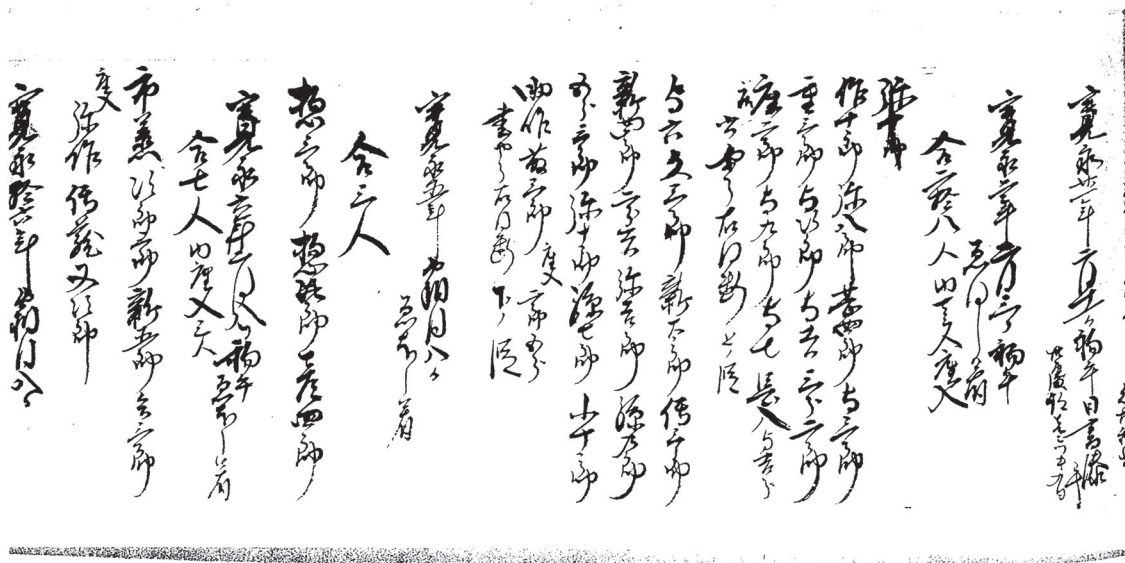


写真2 「高木家文書」より寛永2～5年の座入歴名(高木治良兵衛家所蔵)

表2 釜座町文書に見る座衆名 (慶長7年~寛文8年)

出典 高木家文書 (京都市歴史資料館蔵) 第12冊 フィルム (紙焼) no.6132-155 ~ 202
 史料名 「釜座伝来記」
 形態 卷子 (縦19.5cm)
 【凡例】・同文書の別冊子 (第1冊) のno.6132-2 ~ 50も同一文書の写真版であるが、濃淡が見やすく出ている12冊を使用した。
 ・鋳物師名は、原文書で右上から順に列記したものを、この表では左上段から右方向に横へ並べて記した。
 ・用字は原史料のまま。

慶長7年 (1602) 2月14日										
30名	道順 宗重	了清 宗仲	浄西 宗貞	浄慶 以足	宗清 彦右衛門	善正 新兵衛	一旦 又兵衛	道慶 与兵衛	宗久 弥三右衛門	道仁 甚左衛門
38名	藤左衛門 重左衛門 弥五郎 与三郎 小七	弥二右衛門 与三二郎 長四郎 吉二 小五郎	() 彦四郎 三郎二郎 二郎五郎	与七郎 与吉郎 久五郎 新九郎	宗兵衛 新四郎 与吉 藤三郎 弥三郎	甚七 久次郎 長五郎 甚七郎	又七 小四郎 孫七郎 富太郎	孫四郎 弥吉 与八郎 弥一	重太郎 甚三郎 新五郎 助二郎	与一郎 二郎九郎 助五郎 与二郎
慶長11年 (1606) 2月8日										
	三郎左エ門	与太郎	与次	久三郎	与十郎					
元和9年 (1623) 3月10日										
上段 28名	惣五郎 長十郎 助二郎	新七 庄五郎 又四郎	吉藏 長二 太兵衛	惣七 与一郎 庄三郎	清三郎 藤三郎 弥五郎	直三郎 弥十郎 二郎作	長吉 長兵衛 弥三郎	二郎九郎 弥一郎 孫三	長三郎 新三郎	弥三郎 半三郎
下座 7名	理右衛門	与六	甚五郎	作右衛門	与一	与三二郎	藤藏			
寛永2年 (1625) 2月3日 廻ぼし着 合わせて28人、内1人座入										
上座 13名	作十郎 与七	弥八郎 長八	甚四郎 与吉郎	与三郎	重三郎	与次郎	与吉	三郎二郎	庄二郎	与九郎
下座 15名	与六 孫七郎	久三郎 助作	新太郎 藤三郎	傳三郎 二郎五郎(座入)	新四郎	二郎吉	弥吉郎	孫九郎	五郎三郎	孫十郎
寛永2年 (1625) 12月3日 惣座衆88人										
62名	宗久 二郎左エ門 理右衛門 太兵衛 弥次郎 弥七郎 作右衛門	宗寿 対馬 与七 庄右衛門 次郎作 半三郎 甚右衛門	与兵衛 新右衛門 加右衛門 市郎右エ門 弥三郎 藤三郎	甚右衛門 市左エ門 五左エ門 弥三郎 与七郎 新七	与四右衛門 德左エ門 九左衛門 助三郎 二郎九郎 彦兵衛	弥左衛門 清兵衛 五郎右衛門 弥一郎 弥五郎 久次郎	与右衛門 惣右衛門 弥兵衛 庄三郎 三郎右衛門 与三右衛門	彦左衛門 出雲 九郎兵衛 保廣 長吉 富五郎	弥右衛門 五郎兵衛 長兵衛 藤右エ門 孫三 与三三郎	弥次右衛門 彦右衛門 衛兵衛 又四郎 新三郎 与市
廻ぼし着 26名	新四郎 弥吉郎 与吉	助作 与九郎 孫七郎	作十郎 三郎次郎 五郎三郎	弥八郎 与吉郎 与六	次郎吉 市十郎 次郎五郎	与三郎 新太郎	庄二郎 与二郎	弥十郎 久三郎	助十郎 孫九郎	甚四郎 長八郎
寛永5年 (1628) 11月8日 廻ぼし着 合わせて3人										
	惣三郎	惣次郎	彦四郎							
寛永6年 (1629) 2月8日 廻ぼし着 合わせて7人 (内座入3人)										
	市衛門	次郎三郎	新五郎	吉三郎	弥作(座入)	傳藏(座入)	又次郎(座入)			
寛永16年 (1639) 11月8日 廻ぼし着 合わせて5人										
	弥七郎	助次郎	庄五郎	市十郎	弥市郎					
寛永17年 (1640) 11月8日 廻ぼし着 合わせて4人										
	長三郎	勤兵衛	又四郎	七兵衛						
寛永21年 (1644) 2月11日 廻ぼし着 合わせて3人										
	惣四郎	彦二郎	弥右衛門							
正保6年 (5年? 1648) 2月5日端午 廻ぼし着 合わせて12人										
上段 11名	弥十郎 吉三郎	二郎九郎	新三郎	五郎次郎	長五郎	与三郎	吉十郎	与十郎	市三郎	与兵衛
下段 1名	九郎三郎									
慶安2年 (1649) 11月8日 廻ぼし着 合わせて2人										
	孫三郎	重三郎								
寛文8年 (1668) 2月朔日 座人合わせて69人 ※1人多い (弥左エ門が重複か?)。										
	道喜 德左衛門 弥左エ門 八右エ門 弥右衛門 佐右衛門 弥太郎	宗九 富右衛門 忠兵衛 五郎左エ門 弥七郎 浄六 七左衛門	宗順 宗左エ門 九郎兵衛 与三右衛門 弥三右衛門 宗右衛門 宗右衛門 長五郎	道有 小兵衛 五郎兵衛 与十郎 理右衛門 八郎兵衛 九郎三郎	安心 德兵衛 九兵衛 与一郎 宗三 又左エ門 三太郎	庄兵衛 清兵衛 九郎左エ門 長右衛門 助左衛門 惣次郎 茂兵衛 藤兵衛	次郎右衛門 吉兵衛 次郎左エ門 勤兵衛 庄三郎 喜右衛門 新太郎 勘次郎	西運 与四右エ門 与左エ門 次郎兵衛 弥左エ門 喜右衛門 新太郎 勘次郎	藤右衛門 藤左エ門 甚左エ門 弥左エ門 弥兵衛 清次郎 勘右衛門	十左エ門 仁兵衛 次郎右エ門 孫三郎 弥吉郎 長八郎 五郎右エ門
寛文9年 (1669) 2月7日端午 座人合わせて68人 ※作右衛門はこの日新たに烏帽子着か。										
	作右衛門									

表3 三条釜座鋳物師一覧(延宝～文政年間)

出典 高木治良兵衛家文書(京都市歴史資料館架蔵)第12冊 フィルム(紙焼) no.6132-155~202
 史料名 「釜座伝来記」
 形態 卷子(縦19.5cm)

【凡例】・「烏帽子着」「座入」欄の-は父子(〔 〕内は養子・弟子・実子等)、・は兄弟等の関係を示す。
 ・文政4年以降は釜座町文書のみに記載があり、これに依った。(フィルム no.6136-2~52)
 ・no.156-176は年毎の座法等の写。寛文以前の座衆名は表2にまとめた。

頁数	年代	大工所年寄→座年寄	座衆(●は年行事)	烏帽子着	座入
174-176	延宝7年(1679) 8月・11月8日	飯田安心[一老]			
		和田長寿[二老]			
		奥田次郎左衛門[三老]		[養子]次郎三郎(享保20)・ [子]次郎吉(宝永4)	奥田庄右エ門(延宝7) / [弟子]湯浅源兵衛(享和2)
			西村弥左エ門		
		与三右エ門[二老](元禄16隠居)	福岡与三右エ門	福岡与一郎(元禄6)	
			大西浄清		[養子]大西五郎左エ門=村長(天和2)
			西村藤右エ門	[養子]西村宗三郎(元禄8)	
			西村弥三右衛門	西村弥一郎(延宝7)・(3代弥三右衛門孝知=道也/道治)- 弥市郎(宝永4)・弥三右衛門(享保5)・[弟子]桂七右衛門(享和1)・[道也実子]西村弥三右衛門(文化4)	(西村道弥=2代弥三右衛門)- [弟子]桂七右衛門-[弟子]中嶋治兵衛(享保15)・[養子]桂七郎兵衛(享保17) / (西村道や)-[弟子]塩田四郎兵衛(享保5)
			近藤惣右衛門	近藤惣四郎(延宝7)-近藤甚三郎(元禄6)・[養子]惣左衛門(元文3)	(近藤西雲)-[養子]近藤惣右衛門(正徳3)-[養子]惣四郎(享保8) / (近藤惣左エ門)-[弟子]下村伊兵衛(正徳3)
			和田次郎兵衛	和田次左エ門(延宝7)	
		名越浄味[一老](元禄16隠居)	名越浄味	名越弥右衛門(延宝7)	[甥養子]弥右衛門(享保7)・(享保13)・[養子]同名(安永9)-[養子]同名(寛政6)
			西村藤左エ門	西村藤三郎(延宝7)・藤吉(享保9)・大次郎(享保9)・[弟子]平井市兵衛(享保18)	
			貝鳥甚左エ門 ●	貝鳥甚次郎(延宝7)・貝鳥甚左エ門(吉信)(延宝7)-甚右衛門(宝永4)・(次男)卯之介(享保9)・満之介(延享4)	[弟子]安田庄兵衛(宝暦3)・[弟子]岩田源兵衛(天明6) / (甚左衛門実子)貝鳥三右衛門(寛政7)
			廣瀬仁兵衛	(清右衛門)-廣瀬新兵衛(元禄6)	[養子]廣瀬清右衛門(延宝7)-佐兵衛(安永7)
			西村九郎兵衛	西村九郎二郎(享保17)	(九郎兵衛吉次)-[弟子]桂伊兵衛(正徳3)・[養子]西村九兵衛(寛延4)
			川上勘右衛門		[養子]川上勘左エ門(延宝7)
			和田吉兵衛	(吉兵衛重永)-七次郎(宝永4)-(吉兵衛孫)大六(享保17)・(同二ノ孫)俵助(元文6)	[養子]和田吉兵衛(元禄6)・[弟子]山田源六(寛保2) / 和田吉次郎(宝暦4)
			西村五郎兵衛		
			福岡与一郎	福岡与六(延宝7)	
			和田又左エ門		
			西村藤兵衛		
			近藤勘兵衛 ●		近藤勘兵衛(元禄13年)
			福岡兵右衛門		
	安見七左エ門	安見五郎三郎(延宝7)			
	和田清兵衛				
	名越弥七郎	名越弥吉郎(延宝7)			
	西村新太郎				
	西村九郎三郎	西村次郎九郎(延宝7)			
	高橋作右エ門	高橋五兵衛(宝永4)-高橋三之丞?(享保17)・(作右衛門次男)高橋五郎兵衛(享保10)-[実子]高橋五郎兵衛(=仁三郎)(文政13)・[養子]高橋五郎兵衛(=作兵衛)(天保6)	[養子]高橋嘉兵衛(延宝7) / [高橋五郎兵衛弟子]高橋喜七郎(享和3)		

178	元禄 16 年 (1703)	西村藤右エ門 [一老] 西村総三郎 [二老] 西村新太郎 [三老]			
				井上清右衛門 (元禄 14) ※新規参入	
					水沢弥兵衛 (元禄 12) ※新規参入
179 ※ 194	正徳 6 年 (1716)	西村九郎兵衛 [一老] 奥田次郎左衛門 [二老] 西村藤左エ門 [三老]			
			水沢弥兵衛	[養子] 平十郎	
179-181	享保 7 年 (1722) ～ 10 年 (1725)	奥田次郎左衛門 [一老] 西村藤左エ門 [二老] 貝鳥甚左エ門 [三老]			
181-182	享保 13 年 (1728) ～ 15 年 (1730)	奥田次郎左衛門 [一老] 西村藤左エ門 [二老] 和田吉兵衛 [三老] ※ 重永の子 (4 代吉兵衛 国次)。			
				和田吉次郎 (天明 6) ・ [実子] 和田俵助 (享和元)	
			井上清右衛門 (先 勘右衛門)	大西清吉 (享保 14) 水野勘右衛門 (享保 14)	
200	享保 16 年 (1731)	次郎左エ門 信濃 藤右衛門 清右衛門 甚左エ門? 九郎兵衛 丹波 藤左エ門 弥右衛門 与三右衛門 七右衛門 四郎兵衛		※釜之座中で大鞆を所持する メンバー。	
182-183	享保 17 年 (1732) ～ 20 年 (1735) 8 月	奥田次郎左衛門 [一老] 和田吉兵衛 [二老] 西村藤右エ門 [三老]			
183-184	享保 20 年 (1735) ～ 寛保 2 年 (1742)	和田吉兵衛 [一老] 西村藤右エ門 [二老] 大西清右衛門 [三老]			
			塩田四郎兵衛	塩田四郎七 (享保 20) - (四 郎兵衛孫) 塩田六三郎 (明和 7)	
184-185	延享 4 年 (1747) ～ 宝暦 3 年 (1753)	大西清右衛門 → 浄元 [一老] 西村九郎兵衛 [二老] 貝鳥甚左エ門 [三老]		[実子] 大西清右衛門 (文化 3) ・ [実子] 奥平傳兵衛 (文化 8)	[弟子] 柳本彦兵衛 (文化 13)
			(先 勘右衛門)		[養子] 水野勘兵衛 (寛延 2)
			桂七右衛門	桂金七 (延享 4)	
			山田源六	山田松之介 (寛延 3)	
185	宝暦 3 年 (1753) ～ 4 年 (1754)	西村九郎兵衛 [一老] 貝鳥甚左エ門 [二老] 西村藤右エ門 [三老]			[弟子] 笹田忠八 - [実子] 笹田 忠七 (寛政 11)
					[養子] 廣瀬清吉 (明和 4) [弟子] 前田平八 (明和 3) ・ 太 田茂兵衛 (明和 39)
186-187	明和 7 年 (1770)	西村七左エ門 [一老] 貝鳥甚左エ門 [二老]			
187	安永 4 年 (1775)	西村七左エ門 [一老] 西村七右エ門 [二老]			
			近藤勘左エ門		[養子] 近藤勘兵衛

187	安永5年(1776)	西村七右エ門 [一老] 近藤勘左エ門 [二老]			[弟子] 石黒安五郎
187	安永7年(1778)	西村七右エ門 [一老] 奥田次郎左エ門 [二老]			[実子] 次郎吉(天明4)・[弟子] 安之介(文化13)
187-188	安永9年(1780) ~天明1年(1781)	西村九右衛門 [一老] 和田吉兵衛 [二老] ※ 5代目?		[実子] 和田吉次郎(文化9)	[実子] 西村九郎兵衛(天明1)
188	天明4年(1784)	和田吉兵衛 [一老] 廣瀬清右衛門 [二老]		[実子] 清吉(天明5)	
188-189	天明5年(1785) ~6年(1786)	和田吉兵衛 [一老] 近藤勘兵衛 [二老]		[実子] 近藤勘兵衛(文化8)	
			奥田次郎吉		[弟子] 田中清七(天明6)
			石黒藤兵衛		[実子] 石黒源三郎(寛政3)
189	寛政3年(1791) ~6年(1794)	西村弥三右衛門 [一老] 和田吉兵衛 [二老]		[実子] 西村弥三右衛門(文政13)	
			石黒藤兵衛		[実子] 石黒源三郎(寛政3)
189	寛政7年(1795)	西村弥三右衛門 [一老]			
189-190	寛政11年(1799) ~12年(1800)	奥平清右衛門 [一老]			※「名前」:(和田吉次郎実子) 次郎吉・(西村弥三右衛門妻) 西 村加の
			西村九郎兵衛	[実子] 西村九兵衛(寛政12)	
			?	田中喜三郎	
190	享和元年(1801) ~2年(1802)	石黒源三郎 [一老]			
191	享和3年(1803)	奥田二郎左衛門 [一老]			
191	文化2年(1805)	近藤勘兵衛 [一老]		[実子] 近藤勘兵衛(文政4)	
			下間庄兵衛(3代浄 汲)	[浄汲実子] 下間庄兵衛(天保 10)	[弟子] 下司安兵衛(文化2)・ [弟子] 下司亀次郎(文政13)・ [弟子] 松下安兵衛(天保12)
191	文化3年(1806) ~4年(1807)	和田吉兵衛 [一老]			
191-192	文化8年(1811) ~9年(1812)	和田俵助 [一老]		[実子] 和田俵助(=定二郎)	
			田中清七	[実子] 田中清兵衛(文化8)	
			笹田忠八	[実子] 笹田忠八(=政八郎) (文化9)	
192	文化13年(1816)	奥田次郎左衛門 [一老]			
6136-48	文政4年(1821)	大西浄雲 [一老]			
6136-48	文政6年(1823) ~49 ~7年(1824)	和田吉兵衛 [一老]		[養子] 和田吉兵衛(=金三郎) (天保9)	
			柳本彦兵衛	[実子] 柳本彦兵衛(=幸吉) (文政6)	
			西村九兵衛(※九 郎兵衛?)	[実子] 西村九兵衛(=然二郎) (文政7)	[弟子] 戸谷源助(文政6)
6136-49	文政11年(1828)	近藤勘兵衛 [一老]		[弟子] 西文?宗兵衛(天保9)	
			安之助	[養子] 安之助	
6136-49	文政13年(1830)	大西浄雲 [一老] 笹田忠八 [二老]			
6136-49	天保6年(1835)	大西浄雲 [一老] 奥平了保 [二老]			
6136-50	天保8年(1837)	大西浄雲 [一老] 笹田忠八 [二老]			
			(国貴?) 伊兵衛		[実子] 国貴源吉(天保8)
6136-51	天保9年(1838) ~10年(1839)	大西浄雲 [一老] 近藤勘兵衛 [二老]			
6136-51	天保12年(1841)	大西浄雲 [一老]			

あった可能性も、なお考察の余地があるように思う。

表3は、17世紀後半以降の座年寄と座衆名、さらに各家を継承した子弟・弟子などを整理したものである。町人における元服の儀礼である「烏帽子着」、座の正式メンバーとして迎えられる「座入」については、史料原文では延宝7年(1679年)の項には入っていないが、この時点で座衆であった人物や家がいくつあったのか、それらが次の世代にどう継承されたのか、師弟関係はどうなっていたのかが分かるように、延宝7年以降の各年の項で言及があった人物の情報を、同年の各家の項の後に追記していった。例えば表のなかで、同年の「烏帽子着」の欄に広瀬新兵衛(元禄六)とある場合、史料原文では元禄6年の項に「ゑぼし着 広瀬新兵衛」と書かれている。これを延宝7年の項に追記してある。また表中の〔養子〕〔弟子〕〔実子〕は、史料原文の附記の通りの表現で挙げている。

「釜座伝来記」において座衆全員の名が記録されているのは、表3の冒頭に挙げた延宝7年が最後であり、以後は基本的にその年の座年寄名と烏帽子着・座入の該当者名が挙げられるのみなので、座衆構成がいかに変化したかの全貌はこの史料のみでは分からない点が多い。ただ、その時点で年寄・座衆であった、中世以来の系譜をもつ家が、座法に基づいていかにして家を継承していったか、またそれが出来ずに衰退したか、外部からの新規参入が増えるのはいつの時期かなどを考えることが出来る。

ちなみに1679年当時、三条釜座を構成していたのは、一老の飯田安心、二老の和田長寿以下、「年寄」として三老を務める奥田次郎左衛門、二老の福岡与三右エ門、一老の名越浄味であり、その下に座衆が24名いた。家で分けると、西村家9名、大西家1名、近藤家2名、和田家5名、名越家2名、貝鳥家1名、広瀬家1名、川上家1名、福岡家2名、安見家1名、高橋家1名となる(飯田家は以後見られない)。このうち大西・西村・近藤・名越・貝鳥(貝取)・高橋家のように、代々が家業を継承してゆく家もあるが、途中で座衆から外れてしまう家がある。また各家における座入資格の継承のために、実子以外にも養子や弟子を後継者としてゆく例が時を追って増加する。座衆中の有力者が就く年寄職の家は、18世紀以降には西村・和田・近藤家などに限定されるが、19世紀に入ると、旧来の釜座鋳物師の血縁者ではない鋳物師(奥平・石黒・笹田家等)が現れ、師匠家から自立するなどして一家を構え、比較的短期間で座を統率するようになることなどの推移が分かる。

17世紀初頭に「天下一」を名乗る鋳物師を輩出した家が姿を消し、幕末には釜座の成員も大きく入れ替わっていたことが、表3から判明する。その背景には、市中における産業構造の変化や、19世紀以降に進む新興住民の流入などが想定可能であろう。

IV. おわりに

三条釜座鋳物師の存在はよく知られているが、実際にはどのような人々によって座が構成されていたのかについては、意外にも研究があまり進んでいない。本稿では梵音具の銘文と釜座町文書(高木家文書)という、性格が異なる史料に着目し、鋳物師集団の実態の一端を解明しようと試みた。今後は、梵音具の所蔵者における資料(梵鐘入手の経緯を示す文献等)の調査を進め、三条釜座に残された上記の文献資料とつきあわせ、一見単調に見える梵鐘の銘文に含まれている豊かな地域社会や職人集団の実相の理解を深める方向で、研究を進めていく必要がある。

追記：

河島一仁先生は京都学専攻へ3年間所属し、その最終年に専攻の改組の動きが急ピッチで進められる中、専攻存続に関して筋の通った意見を常に示された。学問としての「京都学」が大学教育の場でいかに成り立ちうるかという重い課題を頂いたと思う。その学恩に答えられるよう、今後も努力を続けたい。

注

- 1) 本調査(滋賀県所在梵音具資料調査)は平成21年度から24年度にかけて国庫補助事業として実施され、県内に所在する未指定文化財の梵鐘(江戸時代以前)、鰐口(慶長年間以前)、これらを所有する社寺が所有する総ての梵音具を確認、記録した。調査終了後、その全容に関して『滋賀県所在梵音具資料調査報告書』(2013年)が作成された。私も調査メンバーの一人として従事し、同報告書所収の「三条釜座鋳物師関連資料について」を執筆した。本稿はそれを補正・一部加筆したものであり、文中引用している「滋賀県調査」の梵音具の写真や銘文・寸法等は本報告書に掲載されているので、併せてご覧頂きたい。
- 2) 大塚活美「中世における梵鐘と人々の暮らし」(『京都文化博物館研究紀要』第2集、1989年)。
- 3) 中平了悟「滋賀県所在梵鐘の銘文について－銘文の形式と典拠に関して－」、同前報告書所収。
- 4) 横田冬彦「『天下一』称した鋳物師」(岩井忠熊編『まちと暮らしの京都史』、文理閣、1994年)。大西清右衛門『茶の湯の釜』(淡交社、2004年)。表千家北山会館編『特別展 千家十職大西清右衛門家の釜と金工－茶の湯工芸の伝統と創造－』(2009年)等。
- 5) 表1の作成に当たり、参照した文献は以下の通りである。香取秀真『金工史談』(櫻書房、1941年)。同『続金工史談』(櫻書房、1943年)。『京都の歴史』3・4・5巻(学藝書林、1968～72年)。久保仁平『鐘の戸籍(二) 梵鐘行脚』(私家版、1981年)。坪井良平『梵鐘の研究』((株)ビジネス教育出版社、1991年)。また滋賀県調査で新たに確認された梵音具、各種ウェブサイトに掲載された情報も含む。なお本稿では、あくまで銘文のある作品を取り上げており、治工名が関連する古文書等で判明しているが無銘の茶釜等は挙げていない。
- 6) 栗東歴史民俗博物館『近江の鋳物師－辻村鋳物師の活躍－』(2002年)。佐々木進「近江の鋳物師と梵鐘について」(『滋賀県所在梵音具資料調査報告書』、2013年)他。
- 7) 『明倫誌』第一部第六章「三條釜座の考究」(水上毅執筆、1939年)。寺尾宏二「鋳物師の座」(『経済史研究』第24巻第6号、1940年)。廣岡泰「三條釜座の研究」(『経済史研究』第27巻第5号、1942年)。豊田武『増訂 中世日本商業史の研究』(岩波書店、1947年)等。
- 8) 中川弘泰『近世鋳物師社会の構造－真継家を中心として－』(近藤出版社、1986年)。笹本正治『真継家と近世の鋳物師』(思文閣出版、1996年)。加藤俊吾「近世大坂の鋳物師」(鋳造遺跡研究会編『鋳造遺跡研究資料2008』、2008年)等。
- 9) 寺尾前掲注7は延宝7年(1669年)8月の定書を挙げ、2月初午に座の新たな成員が烏帽子着・座入をなし、11月の集会で正式に座衆として承認されたとし、座衆の人数が増えるに伴い、中老を3名に増員し、新規加入者への統制を行ったと推定している。

(本学文学部教授)

Organization of the Sanjo-Kamanza Foundries in the Early Modern Period

by
Satoshi Tanaka

From the Middle Ages to the end of the Edo period (1603-1868), foundries gathered in Sanjo-Kamanza in Kyoto, and were known throughout Japan for their diverse metal processing work, from tea kettles to Buddhist altars and farming tools. The Sanjo-Kamanza foundry made Bon-ongu (Bonsho 梵鐘 bells, and other musical instruments), which are still preserved in temples and shrines throughout Japan.

In this paper, using the inscriptions on these Bon-ongu and the old documents of Sanjo-Kamanza, I will elucidate the genealogical relationship of the craftsman's family, which has many unclear points, and provide materials for future research.